

# 大連日語専科学校の研究

経 志 江

## 1. はじめに

中国における日本語教育の展開は1960年代から始まる。その背景には中ソ関係の悪化があった。とりわけ1959年にソ連が原爆供与に関する中ソ間の国防用新技術協定を破棄、翌1960年にソ連共産党指導部が中国に派遣していた技術専門家を引き揚げたことによって対立が決定的となった。中ソ対立は中国の外交を転換させた。これまで社会主義陣営の国々にこだわっていた中国は、資本主義陣営の国々に急速に接近し、1964年にフランスと国交を結び、国際社会に進出する姿勢をみせた。

いうまでもなく外交を支えるのは、相手国の言葉や文化に精通する言語人材である。それまでは「ソ連一辺倒」であったため、ロシア語以外の言語人材は非常に乏しかった。こうした実情を踏まえ、中国政府は国家プロジェクトを立ち上げ、英、日、仏、独、スペインの言語人材を養成するための外国語専門学校の設置を急いだ。対外政策を推進する国務院外事弁公室は高等教育部（文部科学省に相当）と連名で、1964年3月5日に中国共産党中央委員会に「關於解決当前外語幹部嚴重不足問題的応急措施的報告」（直面する深刻な外国語幹部不足問題を解決するための応急措置に関する報告）（以下、報告）を上申した。報告には、「目下、国際情勢は急速に発展し、外務翻訳幹部の需要は激増している。また、国内社会主義建設における新しい大躍進情勢は形成されつつあり、科学研究など各分野にも相当数の外国語幹部が必要となる。これらの需要を満たすため、外国語教育は大幅に発展、調整および強化されなければならない」と国内外情勢の変化とこの状況への対応が必要であるこ

とを指摘した<sup>1)</sup>。具体的には、「極端に不足している英、日、仏、独、スペインの言語人材とそれに対するロシア語人材の過剰について検討し、この三年の内に専科外国語学校を設置、学生を高校卒業生から募集する」という緊急措置の必要性を強調した。また、「外国語大学の在校生にあらかじめ就職先を決め、特別な事情によって70-80%の在校生を繰り上げ卒業させることができる」こと、「留学生を大量に派遣する」こと、「外国語訓練機関を設ける」ことなどが記された<sup>2)</sup>。報告は1週間後の12日に承認され、高等教育部が中心となって着実に実現するよう命じられた。「報告」に続き、「外国語教育における七年間の企劃綱要」が公布された<sup>3)</sup>。これにより1964-70年の7年間、毎年外国語の新入生定員は英語が6,950名、日本語が910名、ロシア語が700名、スペイン語が687名、ドイツ語が450名、アラビア語が220名、その他の言語が910名で、計11,749名であった<sup>4)</sup>。英語と日本語が重視されたが、日本語は格別といえる。本文で述べるが、日本語が目立って重んじられるようになった背景には、中日両国に民間貿易が始まったことがある。

国策によって、中国は1964年に3つの外国語単科大学と6つの外国語専門学校を設置した。中には日本語人材養成のみの専門学校、大連日語専科学校があった<sup>5)</sup>。中日国交正常化の8年も前の1964年9月21日のことであった<sup>6)</sup>。大連日語専科学校は日本語人材を養成することを目的とし、専科、つまり3年制の高等教育機関であった。大連日語専科学校の誕生は、中国における日本語教育の画期的なできごとである。それまで少数の日本研究者養成は北京大学と北京対外貿易学院の日本語学科が行っていたが、ここにきて中日交流の実務を担う新たな人材を大量に養成することを目指すようになり、当時の中国の対日政策の積極性を表している。

しかし、これほど重要なできごとに対して、これまで日中関係史界や日本語教育史界は注目してこなかった、いや気づいていないと言った方がいいかもしれない。現代日中関係史年表編集委員会（委員長は本庄比佐子、委員は石井明、岡部達味、鎌田文彦、藤井昇三、山田辰雄）が2013年1月に出版した『現代日中関係史年表1950-1978』（岩波書店）には、中日国交断絶期の日本

語教育について、1958年9月に出版した中国最初の日本語文法書に関する記述があるが、「陳信徳編著『現代日本語実用語法』上冊、北京・時代出版社刊。1959年3月下冊、刊」という至って簡略なものであった。中日国交断絶期という特殊な時代に誕生し、日本語教育の量的普及の礎となった大連日語専科学校やそれを支えた日本語教師については全く触れていない。

こうした先行研究の空白に対し、本論文では中日国交断絶期の日本語教育を象徴する大連日語専科学校に的を絞って研究を行う。国交もない時代、中日両国の民間貿易を始めとする両国の交流に支える日本語人材の養成は、後に中日関係の改善に大きく寄与したからである。こうした事実の解明を通して混沌を極めていく中日関係に光を当てたい。

具体的には、以下の3点について明らかにする。

1. 大連日語専科学校の設置過程を解明する。
2. 中国国内における日本語教師の採用の実態を解明する。
3. 学びの風景や学校生活、進路など学生側の事情をできるかぎり解明する。

なお、研究資料としては大連日語専科学校で厳格に管理されている公文書（檔案）を用いるほか、2009年8月に筆者が大連に赴き、現地調査を行った記録も使用する。かつて一緒に日本で日本語を学んだ同窓、大連外国語学院の学部長および夫人（同大学図書館員）のご協力の下、現地調査は順調に進んだ。また、『大連外国語学院建校四十年紀事』の執筆者であった孫吉田氏（元大連外国語学院副学長）と陳岩氏（大連日語専科学校1期生、元大連外国語学院日本語学部長）への聞き取り調査も実現した。孫氏は瀋陽師範学院政治教育学部を卒業した直後の1964年8月に本校に赴任した。政治科目の担当や学校の党委員会などで政治幹部として活躍し、1983年から2000年まで副学長も務めた。いわば波乱に富んだ学校の歴史とともに歩んだ大連日専通である。こうした当事者へのインタビュー記録は本論文の重要な柱の1つとなる。

## 2. 大連日語専科学校の設置過程

### (1) 設置の背景

中日国交回復前の1950-60年代、両国民の間には経済・社会・文化面での友好運動が盛り上がりを見せていた。とくに「民間貿易」と呼ばれる経済交流が「積み上げ外交」の柱として行われていた。その歴史は、1952年4月にモスクワで開催された国際経済会議から始まる。日本から出席した参議院議員高良とみは、中国代表である南漢宸の要請を受けて、5月に帆足計や宮腰喜助と共に中国を訪問し、南漢宸中国国際貿易促進委員会主席と第一次「日中民間貿易協定」を結んだ。その経緯について、高良は次のように記した<sup>7)</sup>。

シベリア訪問を終えた私は、ようやく到着した帆足さんや宮腰さんとハバロフスクで出会い、三人で中華人民共和国へ廻ることにしました。モスクワの経済会議でお会いした中華人民共和国の方がたから、ぜひにと招かれておりましたし、わが国と国交を結ぶに至っていない中国へ行くためには、現在いるソ連から入るのが一番よい方法だと思えたからです。私たちがゴビ砂漠を越え、ウラル山脈を越えて北京に入ったのは、五月も半ばのことでした。……

中国でも私たちは大そう歓迎を受けました。モスクワ経済会議で一緒だった代表団の南漢宸氏、アジア局長をしていらした蕭向前氏、そして孫平化氏等のあたたかい出迎えを受けて、私たちは思わず胸をあつくしました。彼らのうち多くは、かつての日本で教育を受けられた方で、私たちの訪問にさまざまな感情を交錯させていらっしゃるようでした。

中国側は、モスクワの国際経済会議の決定に基づき、ただちに中国国際貿易促進委員会を結成していましたので、私たちは南漢宸氏ら促進委員の人びとと、早速交渉に入りました。そして十日ばかりたった6月17日、ついに日中第一次民間貿易協定に調印することになりました。……輸出入それぞれ三千万ポンド、総額六千万ポンドの規模になりました。細か

い内容については、私が腸を悪くして入院していたためもあり、専門の帆足さんたちが交渉にあたってくれました。……こうして戦後初めての日中両国間における民間貿易協定が成立いたしました。

高良らは、新中国を訪れた最初の日本人政治家であった。日本人政治家を招請した背景には、新中国の対日政策の方針があった。それは「中日両国人民の間（政府の間ではなく）の友好関係を発展させることによって、米国を孤立させ、そして間接的に日本人民に影響を与えることで、日本政府に圧力をかけ、日本の対中政策の変更を迫ることによって、次第に中日関係の正常化を実現させる」というものであった<sup>8)</sup>。したがって、新中国の指導部はこの日本人政治家の初訪中を極めて重視していた。「周恩来総理事務室の指導のもと、各部署から集められた人員」による臨時対日活動グループが構成された。「総理事務室の責任者であった周榮鑫と外交部（日本の外務省にあたる）アジア局専門員の謝爽秋」が陣頭指揮を執った。直接接待に当たったのは中国国際貿易促進委員会で、南漢宸主席、冀朝鼎秘書長、接待事務室招待所（宿泊所）主任孫平化、南漢宸の秘書（日本語通訳）簫向前、外交部が派遣した日本語通訳林方、庶務の董超管であった<sup>9)</sup>。

高良らの訪中の結果、1952年6月1日に第一次「中日民間貿易協定」が北京で調印された。署名した中国側の代表は南漢宸で、日本側の代表は高良とみ、帆足計、宮腰喜助であった。以降、1953年10月の第二次「中日民間貿易協定」、1955年5月の第三次「中日民間貿易協定」、1958年3月の第四次「中日民間貿易協定」が次々と調印された。しかし、この民間貿易は、1958年5月に長崎で発生した中国国旗侮辱事件によって中断を余儀なくされた。

中断された民間交流の状況を打開するために、1959年9月石橋湛山元首相が訪中した。周恩来総理と共同声明を発表し、「政経不可分の原則」で一致した。さらに池田内閣が成立した直後の1960年8月、周恩来総理は日中貿易促進会専務理事鈴木一雄ら3名と会見し、「貿易三原則」（政府間協定締結・個別的民間契約の実施・個別的配慮物資の斡旋）を提示した。すなわち政府間協定、民

間契約、個別的な配慮であった。

1960年末、日本の11商社が「友好商社」と指定され、個別的配慮による「友好貿易」が始まった。友好貿易の展開に伴って、日本国内では、1960年10月に日中貿易再開促進・国交回復要求実現業者大会、11月に「日中政府間貿易協定実現要求関西業者大会」と「日中貿易即時再開全国業者大会」が相次ぎ開催された。

一方、池田首相は日中貿易の拡大に格別な熱意を持っていたので、1962年9月に松村謙三を調整役として中国に派遣した。周恩来総理と「日中貿易拡大に関する会談」を行い、両国貿易の促進、漸進的・積み上げ方式による政治・経済関係正常化について一致した。これを踏まえ、翌10月、高碕達之助経済訪中使節団が訪中し、周恩来総理や廖承志國務院外事弁公室常務副主任と相次ぎ会談し、11月9日に「日中総合貿易に関する高碕達之助・廖承志の覚書」に調印した。その後進められていく貿易事業は、中国側代表廖承志と日本側代表高碕達之助の頭文字をとって「LT 貿易」とも呼ばれるようになった<sup>10)</sup>。1962年12月、日中貿易促進会理事長鈴木一雄、日本国際貿易促進協会副会長宿谷栄一および日本国際貿易促進協会関西本部専務理事木村一三と中国国際貿易促進委員会主席南漢宸と「日中友好貿易促進に関する議定書」を結んだ。

「覚書」には、貿易を順調に進めるため、相手の国に連絡事務所を置くこととし、また、期限は1967年12月31日までとしたが、その後も両国が希望すれば延長することもできると明記された。これまでの民間貿易と異なり、事実上は政府が保証し、長期的な取引をも可能にした契約であった。日本側は半官半民のかたちだが、中国側は政府がすべてを担った。

1963年10月4日、中国は中日交流を全面的に推進するため、中国日本友好協会を北京で設立し、建国初期に副総理を務めた郭沫若が名誉会長、廖承志が自ら会長となった。『人民日報』はこれについて『中日友好的里程碑』（中日友好の一里塚）と題する社説を發表した。さらに1964年8月、廖承志事務所東京駐在連絡事務所が成立した。

## (2) 大連日語専科学校の設置

中日交流の展開には、橋架けとなる日本語人材が欠かせなかった。こうして、「1」で述べた「直面する深刻な外国語幹部不足問題を解決するための応急措置に関する報告」がなされ、急速に展開された中日貿易の要請によって大連日語専科学校の設置構想が具体化された。

『大連外国語学院建校四十年紀事』によると、「報告」が出た1964年3月5日、高等教育部は、陳濤<sup>11)</sup>北京対外貿易学院教授に依頼し、「大連日語専科学校設置計画草案」を起草した。陳濤は中国での日本語研究の最高権威の一人で、中国最初の『日漢辞典』を編集した人物である。陳濤は中国日本語教育の礎を築いた代表的な人物であり、本研究の研究対象でもあるが、陳濤についての詳細な考察は別稿に譲る。

草案には養成目標、課程設置、教学方法、教学設備などについて具体的な意見が述べられた<sup>12)</sup>。しかし残念なことは、この「草案」は大連外国語学院檔案室の資料の中には見つかっていない。また、『陳濤先生追悼録』や陳濤が教鞭を取っていた対外貿易経済大学の図書館にもなかった。ただ大連日語専科学校創立当時の職員、『大連外国語学院建校四十年紀事』の編執筆者である孫吉田の証言によると、学校創設に当たって陳濤の「草案」をかなり参考にしたようである。

1964年4月、大連日語専科学校創設委員会が立ち上げられた。于楽（旅大市教育局副局長）を委員長に、彭忱（遼寧省教育厅高教局秘書主任）、于及川、楊青山、周維廉、王増国が委員として任命された。彭忱と于及川が教師の選抜や研修、周維廉が仕事の分配、楊青山が教育機材など物質の調達、王増国が校舎の建設や総務を担当した。早速遼寧省人事局と省教育厅は教職員の選抜条件を策定し、省教育厅高等教育局は全省の高等教育機関から教職員の選抜を始めた。三回にわたって222名が選ばれ、うち、日本語教師が75名、国語教師が16名、政治教師が11名、体育教師が5名、職員が115名であった。1964年6月3日、遼寧省は劉際霖を校長に任命した。日本語教師については「3」で具体的に述べるが、1つの言語教育をこれほどまで充実させるということは



極めて異例のことであり、中日関係史並びに日本語教育史において他に比肩するものがない、まさに空前絶後といってよい。

1964年7月、学校側は高等教育部の協力を得て、北京から日本語専門家を招請し、彼ら新人日本語教師に対して日本語講習を行った。この講習を担当したのは、北京広播事業管理局などに所属している徳地末夫<sup>13)</sup>およびその夫人である徳地香縷子、外文局に所属している横川辰子<sup>14)</sup>、由森信一など日本人「専門家」<sup>15)</sup>であった。時期は1964年7月16日から8月22日までであった。大連日専専科学校（以下、大連日専）は、講習が必要と思われる49名を受講させた。その他に周辺学校からの受講者が集まり79名が参加した。

これら「専門家」に関する費用について、大連日専は1964年7月22日に高等教育部に伺書「關於專家講課費、生活費開支弁法的請示」（専門家の授業費、生活費の支払いに関する伺い）（(64)大日校字第10号）を出した。主な内容は以下の通りである。

1. 交通費：日本同志の北京から旅大市までの往路交通費は、所属部署が負担すること（徳地末夫、徳地香縷子および3人の子どもの交通費は北京広播事業管理局がすでに支払い済み。横川辰子の交通費は我が校が立て替える）。旅大市から北京への帰路交通費は我が校が負担する。
2. 講義費：徳地末夫と横川辰子二同志は国から給料を支給されているので、講義費は支払わない。徳地香縷子の講義費は支払う予定で（仕事の内容は未定）、月240元（1日8元）で計算する。
3. 日本同志の来校および離校時の簡単な宴会およびその他の招待費は計400元の予算を試算している。
4. 日本同志の食事費は、1人1日2元を予定している。うち、我が校は1元を補助し、残りは本人が負担する。また、本人の要望に応じて増減可能である。



5. 宿泊費と市内交通費について。宿泊先は甲級住宅で1人当りは15-20元、家族の場合は1世代25-30元と計上する。車代は1人1日約8-10元とする。

伺書には別紙一覧表が添付され、項目ごとに金額が記された。例えば、旅大市から北京までの列車は最高等級で計414元、宿泊はホテル所有の戸建て住宅で1日計58元、送迎はホテルの車で1日30元、合計4,934元などである。当時、大学教授の平均給料は220元程度であったので、これら講師の待遇はかなりよかったと言える。新中国における日本語「専門家」の希少価値がここに窺える。

新人日本語教師に対する日本語講習を終えた後の8月24日、遼寧省は省教育厅が上申した大連日語専科学校の1,200名学生規模案について許可を下した。

同じ頃、教室や宿舍など校舎に関する計画も確定された。新しい校舎の予定地や予算が決定されるまで、教室は大連工学院、大連海運学院、大連海運学校、遼寧師範学院、大連鉄道学院、旅大教師研修学院から借り、宿舍は近辺の村から借りた。大連工学院、大連海運学院、大連海運学校は栾金村の周辺にあるので、大連工学院、大連海運学院、大連海運学校から借りた教室で授業を受ける学生は栾金村に宿泊し、遼寧師範学院と大連鉄道学院から借りた教室で授業を受ける学生は馬欄村に生活することになった。

もう一つ重要な課題は、教学計画案の作成である。大連日語専科学校が「教学方案」（以下、「方案」）を出したのは、開学直前の1964年9月の中旬であった。

「方案」には「我が校は、愛国主義と国際主義の精神を有し、共產主義の道德品質を有し、党の指導を支持し、社会主義を支持し、社会主義と人民に貢献し、マルクス主義や毛沢東著作の学習およびある程度の生産労働や実際に働き鍛えることで、徐々に無産階級の階級意識、労働意識、大衆意識、弁証唯物主義的意識を樹立する」、「健全な身体と精神を有し、苦しみや辛さを

堪え忍び、国内外各種の生活環境に適応できる」ことを学生養成の目標とした。

専門について「方案」には「学生が現代日本語の基本的な語彙と文法を把握し、日本の歴史と社会概況についてひととおり理解し、日本語版『しんぶん赤旗』のニュースや政論をおおよそ読むことができ、日本のニュース放送を聞き取れると同時にその内容をほぼ記録できる。生活や仕事において日本人と比較的上手に会話ができる。中国語の技能や技巧を掌握かつ運用でき、比較的高い文書能力を持つ。初級日本語の翻訳について必要な口頭通訳と翻訳の基礎力を有することを求めた。

上述した目標に基づき、教養科目には「毛沢東著作選讀」、「思想政治報告」、「中国語文選と作文」、「軍事体操」などが設けられ、専門科目には「基礎日本語」、「日本語会話」、「日本社会概況」などが設けられた。

学習方法においては、「量より質」、その「質はたくさんの練習によるもの」とであると提唱した。言語環境を重視し、学生に毎日必ず対日放送を聞くように求めた。また、電化教育工作室は日本の対中放送を録音し、審査を経て学生に聞かせる。学校内すべての設備や場所に中国語と日本語を記し、学生に関連するお知らせ、公告、欠席届、助学金申請書などは日本語と中国語を同時に記すことを求めた。

準備を整えた学校は、1964年9月18日に525名の合格者を公表し、21日に開学式を行い、10月4日に授業が始まった。こうして大連日語専科学校がスタートした。

### 3. 日本語教師の全体像

#### (1) 教員の選抜と調整

「2」で述べたが、1964年7月頃までに3回にわたる選抜を行った結果、ようやく75名の教員を集めることができた。当時、日本語人材は少なかったため選抜は困難を極めた。選抜の方法は、まず旧満州の人事記録から日本語に

堪能な者を選び出し、調査員が一人一人を面接した。面接では北京大学日本語学科の教師陳信徳が書いた日本語教科書の内容をどれほど把握しているかが問われた。

苦勞して集め養成した75名の日本語教師であったが、出身や経歴などからみて思想的に不十分とされ、結局、1964年12月に「『嚴重問題』を持つ41名の日本語教師や職員を元の部署に戻す」ことになった<sup>16)</sup>。

その結果、1965年1月25日に中国共産党遼寧省委員会文教部が同省委員会に出した「關於調整充實大連日語専科学校日語教師隊伍的請示報告」（大連日語専科学校における日本語教師グループの充實に関する伺い）には、同校の日本語教師は「極めて不足しており、523名の在學生に対して78名の教師を配置すべきであるが、現在はずか43名しかいない。1965年度と1966年度は継続的に學生を募集するので、140名ほど日本語教師を増やす必要がある」と述べた。

こうした記述から、75名の日本語教師の内、32名が元の部署に戻されたことが推測できる。75名はいずれも、中学校教師や校長、行政機関の職員であったが、名簿も存在しておらずこれまで詳細は分からなかった。

新たな日本語教師を選ぶため、省は選抜基準を策定した。その内容は以下の3点である。

- ①（日本語教師）の政治背景については厳格に審査する必要がある。ただし眞實を踏まえて調査を終え問題がないと結論付けられた者は任用できる。
- ②日本語能力は必ずしも高等教育の教師レベルでなくても良い。日本語の基礎があり短期的な講習を受けることによって一年生の日本語授業や授業補佐を担当できる者も任用できる。
- ③各大学などの機関は全体的な利益を考え、国家のための日本語人材の養成を理解し、日本語教師に適合する人材を速やかに選出する必要がある

ある。主に遼寧省と黒竜江省から選抜するが、不足の場合、東北局に上申し、吉林省と黒竜江省にも拡大する<sup>17)</sup>。

その後の日本語教師の選抜は速やかに行われたが、詳細については資料がないため分からない。そこで2009年夏、元副学長の孫吉田（『大連外国語学院建校四十年紀事』の執筆者）にインタビューを行い、実際に教鞭をとった日本語教師たちについて尋ねた。氏は記憶を呼び起こし大半の名前をリストにしてくれた。このリストと第一期生数名の記憶によるリスト<sup>18)</sup>および『大連外国語学院建校四十年紀事』、原康彦『文化大革命に消えた大連日語専科学校物語』を照合して「大連日語専科学校1964年度日本語教師名簿」（以下、名簿）を作成した。

「名簿」を一瞥すると、4つの特徴が見られる。

1つは、学歴からみると、高等教育機関の出身者が多く八割以上を占めていることである。大連日語専科学校における日本語教師の全体的学歴は低いことが分かる。今日の名門としての大連外国語学院の礎として、こうした優秀な日本語教師たちの存在があったのである。

2つは、日本、旧満州や朝鮮や台湾といった旧植民地で学んだ者がほとんどであったことである。彼らの学習歴からみれば、中華人民共和国の日本語教育がこうした戦前日本と深く関わった者によって再開されたことが容易に理解できる。

旧満州の中等教育機関ないし高等教育機関で学んだ者が多く、75名のうち少なくとも46名（太字で示したもの）がそうであった。46名中、高等教育機関で学んだのが37名で、うち吉林師道大学の出身者が13名でもっとも多かった。続いて新京建国大学の出身者は6名、哈爾浜医科大学と新京法政大学は各2名、遼寧大学、奉天工業大学、旅順師範大学、奉天建工学院、奉天国立高等学校は各1名であった。中等教育機関で学んだ者には旅順高公中学部出身者がもっとも多く7名で、南満鉄路中学と大連昭和女子中学校の出身者は各1名であった。

大連日語専科学校 1964年度日本語教師名簿

No	氏名	最終学歴	No	氏名	最終学歴
1	徐萬臨	吉林師道大学	39	隋剛	吉林師道大学
2	劉和民	哈爾濱医科大学	40	陳更強	同上
3	徐尚仁	哈爾濱医科大学	41	張士澤	同上
4	白俊峰	北海道農業大学	42	劉伯陽	同上
5	劉漢璞	新京建国大学	43	来恩富	同上
6	帥德全	慶應義塾大学	44	佟貴功	(吉林師道大学?)
7	郭以明	旧満州の大学 (詳細不明)	45	段得宝	(吉林師道大学?)
8	李如桐	新京建国大学	46	徐永衡	吉林師道大学大学院
9	王煥良	旅順高公中学部	47	郭重光	東京某経済学院
10	安松齡	同上	48	黎青竹	早稲田大学
11	孫茂先	同上	49	劉信宏	東京美術専門学校
12	尹靈	全州女子高等学校	50	李学孔	長崎高等商業学校
13	刁潮	全州商業学校	51	張金川	(留日学生?)
14	楊長生	南満鉄路中学	52	王桂良	(奉天某大学?)
15	李蔭蓮	奉天国立高等学校	53	郭墟	作家
16	佟萬堂	全州農業学校	54	洪青火	1953年帰国、台湾系日本華僑
17	宋国治	大連市公安学校日語班	55	許昌煜	(朝鮮族?)
18	单用有	大連協実学校	56	王立錦	旅順高公師範部
19	王希凡	同上	57	楊福德	同上
20	閻淑仁	昭和女子学校	58	楊秀	同上
21	舒明	(昭和女子学校?)	59	单巨洲	同上
22	阿文	解放軍、日本人	60	曲文奎	全州商業学校
23	阮守勤	東京某 (詳細不明)	61	陳乃行	北京某学校 (詳細は不明)
24	嘎日迪	北京大学日本語学科	62	金亨一	(朝鮮族?)
25	遲軍	同上	63	邵玉英	大連昭和女子中学
26	崔春基	遼寧大学数学学部	64	初玉麟	大連協実学校
27	方相文	不明	65	丁兆偉	張家口軍隊日語学校
28	李錫霖	新京建国大学	66	林彬	不明
29	田夫	同上	67	張玉霖	吉林師道大学
30	陶奎文	同上	68	楊鵬年	不明
31	薛文	同上	69	李銳	不明
32	王漢中	新京法政大学	70	陳志雲	旅順師範大学
33	孟憲凡	同上	71	馬登路	大連協実学校
34	王保民	奉天工業大学	72	秦紹威	奉天建工学院
35	関宗堯	吉林師道大学	73	邱永豊	不明
36	戴俊章	同上	74	高連昇	大連商業学堂
37	趙銘儒	同上	75	于敬河	留日学生
38	田華倫	同上			

(順不同)

注：太字で示したものは、旧満州の中等教育機関ないし高等教育機関で学んだ者である。

斜体で示したものは、日本留学経験者である。

旧満州の学校の出身者のほか、留日学生は11名（斜体で示したもの）、留朝学生は4名、国内学校出身者は4名であった。留日学生は北海道農業大学、慶應義塾大学、早稲田大学、長崎高等商業学校、東京美術専門学校、昭和女子学校などの出身者で、留朝学生には全州商業学校、全州農業学校、全州女子高等学校の出身者があった。また、朝鮮族の者も少なくなかった。そのほか、日本から帰国した台湾系華僑が1名あった。

3つは、北京大学の日本語学科（現北京大学外国語学院日本語学部）からの出身者が2名と張家口軍隊日語学校（現中国人民解放軍外国語学院）の出身者が1名あった。両者とも建国とともに再開や設置されたもので、中華人民共和国ではもっとも古い日本語高等教育機関である。前者は日本研究者や外務官僚などエリートを養成する機関で、後者は軍部のために日本語人材を抛出する機関であった。彼らが大連日語専科学校に配置されたことは、中央政府が大連日語専科学校の創設に高い関心を寄せていたことを示している。

4つは、中国人民解放軍に参加した経歴を持つ日本人1名がいた。詳細は不明であるが、このような日本人が中華人民共和国の建国に尽力したことが『我走過的崎嶇小路－横川次郎回憶録』（新世界出版社、1991年）にも散見できる。

これら日本語教師のほか、日本共産党は、1959年3月3日と同年10月20日の「日本共産党代表団と中国共産党代表団との共同声明」や1961年6月22日の「日本共産党議員訪中代表団と中国全国人民代表大会代表団との共同声明」に基づき、「中日両国人民の友情と団結を強める事業」に支援するという形で党員から選拔し、日本語教師として大連日語専科学校に派遣した。赴任したのは1965年で合計32名であった。中国側の公文書によると、82名の日本人教師を雇う予定であったが、1966年に始まった文化大革命によって日本共産党との関係が悪化し、82名どころか、わずかに招聘できた32名も1966年11月に帰国した。この事実は日本共産党の党史にもほとんど記述されておらず、これまで知られていなかった。しかし、日中国交がない時代、「中日両国人民の

友情と団結」のため、さまざまな危険や困難を乗り越え、中国の日本語教育事業に貢献した32名の日本人教師の存在は重要である。日本語教育が普及したいまこそ、これら日本人教師の研究意義は大きいと思う。これら日本人教師については2014年7月のシドニー日本語教育国際研究大会で発表したので、ここではその詳細について述べない。

#### 4. 学生事情

大連日語専科学校は開校した1964年9月から、文化大革命が始まる1966年5月まで、2期の学生を受け入れた。

1期生は525名で、うち、男は319名、女は206名であった。出身地を一瞥すると、遼寧省が最も多く405名、黒竜江省が80名、吉林省40名で、いずれも旧満州の出身であった。

孫氏の回顧によると、525名の学生を28クラスに分けた。うち、第26クラス、第27クラス、第28クラスは1965年に優等生クラスと指定された。今回インタビューした陳岩氏は第28クラスの1人である。

当時、69名の中国人教師が日本人教師の授業補佐や授業後学生復習の支援に当たったので、日本人教師と中国人教師の間では度々議論があった。とりわけ教材編集や内容選別を巡って、中国人教師は時代の要請に従って「政治思想第一」と主張したが、日本人教師は「勉強第一」と主張した。結局、日本人教師の主張が採用されたことは学生には幸いだったといえよう。

陳岩氏の証言によると、クラスの学生数は大体18-20名であった<sup>19)</sup>。1クラスには1名の中国人教師が授業補佐として参加し、学生指導や教材編纂に従事した。1年目は基礎科目（聞く、話す）を学び、日本人教師が直接担当した。第28クラスの担当教師は Y 氏、Y 夫人、白俊峰であった。2年目は主に文法を学び、担当教師は T 氏、劉和民、帥徳全、田夫であった。中国人教師も日本人教師もみな一所懸命に教えていた。彼らは作家、詩人、編集長、教員など文化人ばかりであったが、中国人教師には日本語を専門とする者がおらず、



旧満州の中学校を卒業しただけという者もいたと語った。

授業は月曜日から土曜日まで行われていた。授業時間と自習時間は概ね1:1.5であった。日本語授業はもっとも多く、毎日2時間で週16時間であった。そのほか、語文（中国の国語）は週4時間、政治は週2時間、体育は週2時間であった。

525名の学生には初年度で休学した学生が9名あり、1967年9月に卒業できたのが509名であった。うち、491名が就職し、残りの18名は様々な理由で暫く配属は猶予された<sup>20)</sup>。

491名中、430名は「機密」や「絶密」という軍隊など国防関係部門に配属され、61名は各省や市の政府行政部門に配属された。国防関係部門に配属された卒業生は全体の87.6%を占めている。創設当初の中日貿易や中日交流のための日本語人材の養成目標とはかけはなれた結果となった。その理由についてはさだかではないが、1967年1月からの日本共産党と中国共産党の関係悪化、同年2月に発足した第2次佐藤内閣の反中政策の展開によって「LT 貿易」交渉の延期、文化大革命による全国各部門の停滞、国防関係部門による人材保護などが挙げられる。

ちなみに2期生は400名が合格したが、実際に入学したのは396名であった。復学した9名を入れて計算すると合計405名であった。うち、男は262名、女は143名であった<sup>21)</sup>。2期生は退学者3名と死亡者1名を除き、1968年に卒業できたのが計403名であった。退学者や死亡者の数を入れて考えると、卒業時の人数は入学時よりも多くなっていたことがわかる。おそらく1期生中の中退者の一部が復学したものと思われる。

403名の卒業生は、386名は國務院外事弁公室に配属、17名は暫く就職を猶予された<sup>22)</sup>。國務院外事弁公室の責任者である廖承志は「LT 貿易」の中国側の責任者でもあり、卒業生を廖の配下に置くことが大連日語専科学校設立当初の目的でもあった。1期生が国防関係部門に配属されたことと違って、國務院外事弁公室に配属された背景には1968年2月からの「LT 貿易」交渉の再開や同年3月の「MT 貿易」の実現、池田創価学会会長など民間人や日本公明党

の日中関係改善への努力などが卒業生の配属に影響を与えたと考えられる。

1966年度から1969年度までは学生を募集しなかった。ただ、孫氏の回顧によると、1969年度と1970年度は、省、市の依頼により、労働者を主体とする「日語訓練隊」を設けた。1969年度は60名、1970年度は30名、計90名を募集した。現在、市の中日国際交流の担当者には、この「日語訓練隊」の出身者が多い。

これらの卒業生は、新しい中日関係を築く中堅的な役者となり、概して出世した者が多かった。陳岩氏の証言によると、1期生の、陳忠新は天津市旅遊局長、趙燕南は天津市外事弁公室副主任、馬興国は遼寧大学副学長、賈淑娟は沈阳市科委副主任、徐甲申は大連外国語学院副院長、蘇華と劉金釗と胡孟聖は大連外国語学院日本語学院教授となった。2期生の、劉桂敏は南開大学日本語学部教授、于進江は山東師範大学日本語学部教授、劉淑梅は山東大学日本語学部教授、劉憲章は海南省貿易促進委員会長、陳喜儒は中国作家協会対外聯絡部長・作家となった。また、就職してから日本の大学に留学し、新華社東京支局に勤めた者が2名いた<sup>23)</sup>。

今回のインタビューで、陳岩氏から第1回生の楊厚孟「難忘恩師単用有」（忘れ得ぬ恩師単用有）と李鳳軍「懷念我的老師吉田先生」（わたくしの先生吉田さんを偲ぶ）という回想文を頂いた。史料として、ここでは訳文と一緒に示す。当時の教室の風を感じられると思う。

#### 难忘恩师单用有

杨 厚孟

每当完成一项与日语有关联的工作任务和取得外语水平较大提高时、总会情不自禁地想起读大学时的恩师--单用有教授。

单老师在给我当班主任时正当中年。帅气的外表加之渊博的知识、极具魅力。尤其是他那画龙点睛的教学方法、不仅使我和我的同学们的日语水平迅速提高、而且受用终身。

1965年春天、单老师担任我们班的班主任。那时、不会讲汉语的日籍教

师只强调会话、只重视听、说、读的训练、坚决不让我们学习语法。理由是：小孩子学说话没有先学语法的、都能学会。对于刚学了一个学期日语的我们很难听懂他们从头至尾全是日语的授课。经常搞得一塌糊涂。有一次、铃木博先生讲动词“て”形的变化规则课。当时、全班同学没有一个能听明白的。铃木老师累的满头大汗、也讲不清楚、同学们急得抓耳挠腮也听不明白。坐在旁边的单老师几度起来想说明一下、都被铃木老师拒绝了。终于下课了、憋了一堂课的同学一下子爆发了。“我觉得以‘く’‘ぐ’结尾的动词应变成‘いて’‘いで’、可‘行く’为什么都变成‘行って’呢？”同学们你一言我一语地在议论。此时铃木老师已离开教室、而单老师仍坐在原位认真地听着。几分钟后他站起来对我们说：“很简单、以‘く、ぐ’结尾的变‘いて或いで’；以‘う、つ、る’结尾的变成‘って’；以‘ぬ、ふ、む’结尾的变成‘んで’；以‘す’结尾的变成‘して’、就这样四种变法。而‘行く、来る’属特殊变化、记住就行了。”大家如迷雾中遇到指路明灯一样高兴。50分钟的课、单老师几句话就概括清楚了、真是画龙点睛啊！此事使我真正认识到语法的重要意义。铃木老师也经常请单老师为我们指点。中日两国老师的团结、两种教学方法的结合、极大地促进了日语教学的发展。

走向社会后、我经常与单老师联系、请教工作中遇到的难题、受益匪浅。同时也把单老师的“画龙点睛”教学法应用到了社会服务中去、颇受欢迎。我想、在有生之年、只要社会需要、愿意继续把单老师的教学法发扬光大、不断延续。

2009年11月9日

私の恩師単用有先生（訳文）

楊 厚孟

日本語関係の仕事を終えたり、あるいは日本語が有る程度進むたびに、ふと大学時代の恩師--単用有教授を思い出す。

単先生が私の担任を務められたのは壮年の頃であった。颯爽として博学でとても魅力的であった。特にその「画竜点睛」の教授法は、私たちの日本語

能力を高めだけでなく、後々まで今でも影響を与え続けている。

1965年の春に、単先生が私たちの担任になった。当時、中国語を話すことができない日本人教師はただ会話を強調し、「聴く」、「話す」、「読む」の訓練を重視し、文法を学ぶことが認められなかった。理由は、「幼い子は文法を習わなくても話せるようになる」ということである。しかし、一学期間しか日本語を学んでいない私たちにとって、終始一貫日本語だけで行われる授業を理解するのはなかなか難しく、授業はいつもめっちゃくちゃであった。

ある日、鈴木博先生は動詞「て」形の変化について講義を行った。当時、クラス中で理解できた者は一人もいなかった。鈴木先生は額に汗をかきながら必死に説明したが、伝わらなかった。一方、学生はもどかしく何とか理解しようとしたが、やはり分からなかった。隣に座っている単先生は何度も立ち上がって説明しようとしたが、鈴木先生に断られた。ようやく授業が終わった。授業中抑えられていた学生の疑問は一気に爆発した。「『く』『ぐ』で終る動詞は『いて』『いで』に変わるはずだと思うけど、なぜ「行く」は「行って」に変わったのか」と、みなが議論していた。その時、鈴木先生はすでに教室を離れていたが、単先生はまだ残って真面目に聞いていた。数分後に、彼が立ち上がって私たちにこう言った。「とても簡単だよ。『く』、『ぐ』で終る動詞はそれぞれ『いて』、『いで』に変形し、『う』、『つ』、『る』で終るのは『って』に変わる。そして、語尾が『ぬ』、『ふ』、『む』の動詞は『んで』に、『す』で終る動詞は『して』に変形する。音便には全部でこの4つの変形ルールがある。あとは『行く』と『来る』は特殊変形で、覚えればいい」。この説明を聞いて、みなは濃霧の道を照らすライトを見たように喜んだ。50分の授業を、単先生はわずかな言葉で纏め、分かり易く説明した。本当に「画竜点睛」である。このことがきっかけで、私は文法学習の重要性が分かり、鈴木先生もよく私たちを指導するよう単先生に頼むようになった。日中両国の先生のご協力と両国の教授法の結合は日本語教育を大いに発展させた。

社会に入ってから、私はよく単先生に連絡し、仕事で出会った難問について教えを請い、大いに利益を受けた。と同時に単先生の「画竜点睛」の教授

法を自ら応用し、その結果、かなり歓迎された。残された人生で社会から求められるならば、単先生の教授法を多くの人に広め、いつまでも続けていきたい。

2009年11月9日

### 怀念我的老师吉田先生

李风军

吉田先生姓吉田名仁、日本关西人、日本共产党关西党总部书记、是我大学时代的老师。1964年10月、我考入大连日语专科学校读书。记得开学的第一天第一课、校方领导向我们引荐说：“这是吉田老师、负责你们两个班的教学……”。在相互寒暄问好之后、我坐下来仔细打量这位新老师。中等身材较胖、显得很健壮；西装革履、仪表堂堂；光亮的背头、利落有致；微红的脸庞、挂着微笑；宽阔的额头、上有一道明显的疤痕、或许记载着岁月的沧桑；八字眉下一双明亮的眼睛、透着智慧的光芒、怎么端详也不像五十左右岁的人。再听他那厚重的声音、看他那沉稳的动作、总的感觉、我面前这位老师既有学者的风度、又有领导干部的风范、令人既有敬畏之心、又有亲切之感。

吉田先生授课严肃认真。那时上学农村来的学生较多、家庭都不富裕、几乎都享受国家助学金。所以、他常说：在中国培养一个大学生、是国家用钱堆起来的。大家一定要努力学习才能对得起国家和人民。所以、他不允许他的学生不用心、一知半解马马虎虎。在提问时、谁说错了一句话、他就反复启发、从发音、语法结构到语调都耐心地讲解指教、直到说的正确为止。这使每个同学都深深感到、一个外国人不顾个人安危、来到中国传道授业解惑、为促进中日友好事业出力、我们有什么理由不好好学习呢。

吉田先生授课灵活风趣、举一反三引人入胜、启迪思维、能调动每个学生的积极性。每次上课前十几分钟、他总是讲自己遇到的有趣的人和事。然后、让大家也讲自己碰到的有意思的事情。我记得最清楚的是、有一次他讲、某天晚上他和夫人去商店买东西、回来路上其夫人在马路上走、不小心高跟鞋插到马葫芦盖的窟窿里扭断了。当时周围又没有修鞋的、只好光着脚走回家、说的

满堂大笑。还有一次，他让我讲个趣闻、搜肠刮肚也没想起来、眼睛直勾勾地盯着吉田老师的火箭式皮鞋。他好像发觉了什么、问我是不是对他的鞋感兴趣。我点头称是、他笑了笑说、这鞋又长又细、前半部是空的、消费了不少材料。从这点也能看出资本主义的“虚伪”。一句话又惹得大家大笑不止。就在说说笑笑之中、大家发音的准确性、语言的表达能力都得到了很大的提高。由于他和大家打成一片、无话不说、无事不谈。一次课间休息时、大家围着他闲聊、不知谁问了一句：“吉田老师、你额头的伤疤是不是小时候淘气磕的。”他说、不是。是二战时、他在中学读书时兵源枯竭、强制中学生参军。他当时被编入海军、任务是守护本土。一天、美军飞机空袭他们的舰艇、一颗子弹擦额而过、留下了这永久的印迹。这也是战争给人民带来的灾难……。

总之、大学的生活是快乐的、快乐来自方方面面、但也来自吉田先生的授业解惑中。

吉田先生博学多才、知识面很广。历史、天文、地理等方面的知识掌握得很多。不论是在教课、还是闲聊中、不仅学到了语言、还能学到许多知识、真是受益匪浅。一次我们和吉田老师谈论秦朝时始皇派内臣徐福携带五百童男童女寻长生不老药、后到扶桑国定居后的故事。吉田老师说：“这个故事有可能有、但据我所知、从北部湾到日本有一条洋流直达日本、如果坐船、不费棹桨之劳也可以飘到日本。应该说凭借水路到日本的人最多。说不定、我的祖上是中国广东或广西人呢！几句话就可以看出、吉田先生不仅见解独到、渊博知识也可见一斑、与其相处真可谓良师益友。吉田先生已经作古了。“一衣带水”分别也未能相见、但他的音容笑貌仍牢牢地记载我们的脑海里、没齿难忘。看到中日关系从解冻到发展、我们十分怀念这位为促进中日关系发展、为使中日两国人民世代友好下去、“竹杖芒鞋轻胜马、一蓑烟雨任平生”的老人。

2009年10月

私の先生吉田さんを偲ぶ（訳文）

李鳳軍

吉田先生は氏が吉田、名は仁である。関西出身で、日本共産党関西支部の書記であり、私の大学時代の恩師である。私は1964年10月に大連日本語専科学校に入学した。新学期初めての授業で、学校幹部が私たちに「こちらは吉田先生です。あなたたちの2つのクラスの授業を担当します。…」と紹介した。お互いに挨拶をした後、私は座ってこの新しい先生を観察し始めた。中背でがっしりとした体格、いかにも壮健に見える。ぱりっとした背広姿できびきびとし、赤みがかった頬に微笑みを湛えている。彼の歴史を刻むかのように、広い額にははっきりとした傷跡が残っており、八の字型の眉の下にらんらんと光る大きな目には知的な光が宿っている。どう見ても50歳前後には見えない。またその低い声と落ち着いた動きには、学者の風采と同時に指導幹部の風格が感じられ、人々に畏敬の念とともに親しみやすさを与えている。

吉田先生は真面目で授業は厳しかった。当時は農村出身の学生が多く、家が貧しくてほとんど国の奨学金に頼っていた。それで、吉田先生は「中国では大学生は国家のお金で育ったのだから、国家と人民の期待に応えられるように頑張らないといけない」と常に言っておられた。だから、先生は一心に学ばず一知半解のいい加減な学習態度は許さなかった。授業で質問に少しでも間違ったら、繰り返しヒントを与え、正しく答えるまで発音、文法さらにアクセントなど丁寧に教えて下さった。一人の外国人が自分の身を顧みず日中友好のために来華し、教鞭を執る姿をみて、私たちはきちんと勉強しないと痛感した。

吉田先生の授業は変化に富んでいて面白かった。彼はいつも1つのことから類推してほかのことも考えさせ、みんなが積極的に授業に参加できるよう導いた。授業前に、彼はいつも自分に起こった面白い出来事を話して、そして私たちにも自分の面白かったことを話すように促した。私が最も印象深かったのは、ある日の夜、先生と奥さんが売店へ買い物に行って、帰り道に奥さんのハイヒルがマンホールの蓋に挟まり折れてしまい、周りに靴の修理屋も



なく、結局裸足で帰った話であった。みな大笑いした。もう1つこんな話もある。ある日、私に1つ面白い話をするようにと指名されたが、いくら考えてもなかなか思いつかず、ただ吉田先生の先がロケットのようになった革靴をじっと見ていた。先生は気づいたようで、自分の靴に興味があるかと聞いた。私が頷くと彼は笑いながら「この靴は先が長細いので、前の部分が空いており、かなりの無駄だ。ここにも資本主義の『虚偽』が見えるね」と言った。この一言にみな笑い声はしばらく止まなかった。こうして喋ったり笑ったりしているうちに、みな発音の正確さや、言語の表現力が大幅に高まった。このように、彼はみなと一体になっていて、何でも話せ、何事も相談ができたから、ある日の休憩時間に、みなが彼を囲んで雑談をしていた。誰かが「吉田先生、あなたの額の傷は子ども時の腕白でぶつけたの？」と聞くと、彼が違くと答え、二戦中に兵士が不足し、中学校で学んでいた彼が兵隊にとられて海軍に配属された。任務は本土を守ることであった。ある日、米軍の飛行機が彼らの艦艇を空襲し、弾が額を擦ってこのような永久に残る痕跡を付けた。これも戦争がもたらした災難だ…と語った。

とにかく、大学生活は楽しかった。この楽しさは様々の要因があったが、吉田先生に教えていただいたことが大きかった。

吉田先生は博学多才で、知識が広がった。歴史、天文、地理などの知識を幅広く掌握していた。授業にしても、普段の雑談にしても、言語だけではなく様々な知識が自然に身に付き、得るところが極めて多かった。ある日、私たちは吉田先生と内臣徐福および五百童男童女が始皇帝の命を受けて長生不老の薬を探し、後に扶桑国に定住した話をして聞いた。先生は、この話は本当の話かもしれない。私の知っているところ、北部湾からは日本への海流がある。船に乗れば、さほど労なく日本に流れ着くと思う。水路で日本に辿り着く人が最も多いと言ってもよい。もしかしたら、私の先祖は中国の広東人あるいは広西人かもしれないよね、と語った。こうした一言からも分かるように、吉田先生は独特な見解と幅広い知識をもっていた。先生はまさによき師よき友といえた。吉田先生はすでになくなった。一衣帯水と言ってもお別れ

してから再会することはできなかった。しかし、先生の声や姿、微笑みはいまなお耳に響き目に浮かび、終生忘れることができない。氷解から今日まで発展してきた中日関係を見つめるとき、私たちは日中関係、日中両国民の友好に貢献した“竹杖芒鞋輕勝馬、一蓑煙雨任平生”（竹杖芒靴軽く馬に勝ち、一蓑煙雨平生を任す）の老人を偲ぶのである。

2009年10月

## 5. おわりに

中華人民共和国が成立した1949年10月1日から、「日中共同声明」に調印した1972年9月29日まで、日本と中華人民共和国の関係はきわめて不正常であった。この不正常な関係に終止符をうつきかけとなったのは、いわゆる民間貿易であった。民間貿易の展開によって「LT 貿易」が実現し、やがて中国日本友好協会の成立を象徴するように、中国は対日政策を全面的に行うようになった。政治的な主導によって、中日交流を担う通訳人材が大量的に求められるようになった。大連日専はこうした時代の要請によって急ピッチで設置された。

大量な日本語通訳を養成するためには、大量の教員が必要となった。しかし、社会主義中国ではイデオロギーが重視され、教員の採用が難航した。各部門から戦前の日本語習得者75名を徴用したが、結局、思想的に不十分という理由で半数が不採用となった。

当時の中国北京には日本の大使館やそれに準ずる代表部がなかったが、日本共産党の代表として亀田東伍がいた。こうした両国共産党の交流の証として、日本人教師たちは国際共産主義者という使命の下、中国に渡って日本語教育を支援した。これら日本人教師については、別稿で明らかにする。

ここでは、大連日語専科学校の結末について触れておく。1970年3月、林彪の戦備命令によって、大連日語専科学校は市から180キロほど離れた庄河县明陽公社農村に移った。同年、学校は「遼寧外語専科学校」に改名し、日、英、

俄、朝、蒙の五専攻（1970年度は日、英、俄の三専攻を開設した）を有する学校となった。日本語人材のみ養成する大連日専はここで幕を閉じた。

大連日専から遼寧外語専科学校に改名した1つの大きな原因は、日本人教師の撤退であると思われる。文化大革命が始まった1966年、日本共産党は中国共産党との関係が悪化し、日本人教師などの帰国を促した<sup>24)</sup>。また、リーダーの Y 氏によると、文化大革命が始まると、「学校は一週連続休講、さらに当分休講、日本人教師は校内には立ち入りできないむねの連絡があった」。さらに紅衛兵の造反で異様な光景を目にし、これまでにない不安を感じた。こうして日本人教師は対策を相談し、9月に二年契約で任期を終えた Y 氏一家は「まず引き揚げ、帰国途中各地から慎重にその実際経過や注意事項を手紙で大連の仲間に知らせ、それを参考に順次計画を立てて帰国することになった」<sup>25)</sup>。結果、1966年11月から12までの間、日本人教師30名は7回に分けて帰国した<sup>26)</sup>。

今回の研究において、卒業生の進路、日本語教師の経歴、教材分析についてはほとんど行っていない。これらの課題の解明によって、大連日語専科学校が中国の日本語教育や中日関係に及ぼした影響を明らかにできる。次の課題としたい。

## 注

- 1) 本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』未出版、2004年、1頁。
- 2) 四川外国語学院高等教育研究所編『中国外語教育要事録（1949－1989）』外語教学与研究出版社、1993年、90頁。
- 3) 前出、四川外国語学院高等教育研究所編『中国外語教育要事録（1949－1989）』、92頁。
- 4) 前出、四川外国語学院高等教育研究所編『中国外語教育要事録（1949－1989）』、95頁。
- 5) 前出、四川外国語学院高等教育研究所編『中国外語教育要事録（1949－1989）』、96頁。
- 6) 前出、本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』、5頁。
- 7) 高良とみ『非戦を生きる－高良とみ自伝』ドメス出版、1983年、164-165頁。
- 8) 張香山著、鈴木英司訳・構成『日中関係の管見と見証 国交正常化30年の歩み』三和書籍、2002年、77頁。
- 9) 簾向前著、竹内実訳『永遠の隣国として 中日国交回復の記録』サイマル出版会、1997年、16頁。

- 10) 友好貿易から LT 貿易までの成立過程については、『西園寺公一回顧録「過ぎ去りし、昭和」』（人間の記録169、日本図書センター、2005年、307-313頁）参照。
- 11) 陳涛先生追悼録刊行会『陳涛先生追悼録』（1991年、非出版）によると、陳の本名は陳日新、別名は陳達民である。本籍は河北省灤県である。1900年に奉天省遼原県（現在の吉林省双遼県）で生まれ、1990年3月6日に亡くなった。私塾や小学校、奉天省立第一中学校を経て、1919年に国費留学生として来日し、1921-25年に慶応大学経済学部で学んだ。在日期间、中国人留学生会長を務め、留学生の進歩的な組織であった「求是学社」に参加した。1922年に謝瑛の紹介により国民党に加入し、留日学生のリーダーとして孫文の国内革命に尽力した。1923-1924年の間、国民党の東京支部常務委員を担当した。1925年、国民党駐日総支部が成立した時、その常務委員に選出された。1926年1月、留日学生は決起して反日・反軍閥の革命運動を行った。その時、留日学生の帰国代表団を組織し、大学を中退して帰国した。帰国後は広東省立第一中学校教務長、1926年に孫文が自ら創設した黄埔軍官学校の政治教官兼第一学生隊政治指導員を担当した。1927年8月1日に南昌起義に参加し、革命委員会主席団委員に選ばれた。前敵委員会書記の周恩来の命令を受け、4日に大連に赴いた。1929年3月に『泰東日報』の記者となり、間もなく編集長に任命された。一方、共産党の地下組織のメンバーとして革命活動を続けた。1942年6月に密告によって国民党に逮捕され、2年間服役した。1945年夏に他の地下黨員と共に貿易会社を設置し、それを表向きの仕事として解放区に大量の医薬品など物質を送った。1945年11月に張家口へ赴き、以降華北地区で経済関係の仕事を務めた。1948年、華北人民政府が成立し、工商処進出口科長、工商部企画処長を担当した。中華人民共和国が成立した後、工商部で『経済統計資料』を編集した。1951年に高級商業幹部学校（後の北京對外貿易学院、現在の對外経済貿易大学）の創設に携わり、当校の教授となり、日本語の研究に没頭した。『朝日新聞』の「ひと」欄『日漢大辞典』編さんのため来日した陳涛（1981年2月28日朝刊、3頁）に「中国での日本語研究の最高権威の一人。…『日漢辞典』（北京・商務印書館発行）の主編者。…初版は1959年…生涯の仕事として『日漢辞典』を本格的に改定し、完べきを期した『日漢大辞典』の編さんを手がけ」たと紹介された。1990年5月5日、中国共産党の機関紙『人民日報』が訃報を伝えた。1991年5月5日、張京先夫人（北京大学日本語教員、奈良女子高等師範学校卒）と下中直也平凡社社長が代表世話人となる陳涛先生追悼録刊行会より『陳涛先生追悼録』が刊行された。
- 12) 前出、本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』、4-7頁。
- 13) 陸軍士官学校52期、銀時計の恩賜品を授与された優等生である（秋元書房『陸軍士官学校』参照）。
- 14) 1908年に生まれ、学生時代は英文学を専攻、日本語雑誌『人民中国』と『人民画報』の日本語専門家。「横川辰子女史の葬儀」（小池晴子『中国に生きた外国人－不思議ホテル北京友誼賓館』径書房、2009年、115-121頁）、横川次郎『我歩過的崎嶇小路－横川次郎回憶録』（新世界出版社、1991年）によると、夫、横川次郎と1936年に旧満洲に渡り、以後、中国で生活した。新中国が成立後の1961年、夫とともに外文局の「専家」として『人民中国』や『人民画報』の改稿に携わった。1999年5月9日、91歳で北京で亡くなった。横川次郎は、1901年福島県で生まれ。1924年に東京帝国大学法学部を卒業して宇都宮高等農林学校の教

授となった。1936年に大連にわたり、満鉄調査部第1調査室の主査となった。戦後は中国東北地区の日本民主連盟に参加した。新中国が成立してからは東北統計局、北京人民大学分校、四川省農業庁を経て1961年に夫人と一緒に日本語雑誌『人民中国』と『人民画報』の「専家」となった。山内一男「横川次郎氏の逝去を悼む」（『中国研究月報』495、中国研究所、1989年5月、41頁）によると、1989年4月12日、88歳で北京で亡くなった。

- 15) 「外国専家」のこと。中国国家外国専家局の招聘・管理の下で、各分野で専門的な仕事に従事し、指導的な役割を果たす専門家のことを指す。
- 16) 前出、本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』、7頁。
- 17) 前出、本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』、8頁。
- 18) このリストは、大連日専の第一期生陳岩氏が同期の友人数名と記憶を照らし合わせて作成してくれたもので2009年11月、東京で本人から手渡された。
- 19) 日本語学院編『大連外国語学院日本語学院40年紀事1964-2004』（未出版、2005年）に掲載された写真「日本語学院67級2班同学合影」の学生数を数えてみると、この第2クラスは22名であった。
- 20) 前出、本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』、24頁。  
一方、日本語学院編『大連外国語学院日本語学院40年紀事1964-2004』（前出、95-97頁）によると、1967年の卒業生は493名であった。また、日本語学院編『日本語学院紀事』（大連外国語学院外文印刷廠、2002年、89-92頁）によると、1967年の卒業生は513名であった。
- 21) 前出、本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』、11頁。日本語学院編『大連外国語学院日本語学院40年紀事1964-2004』（前出、97-99頁）には404名の卒業生が掲載されており、日本語学院編『日本語学院紀事』（前出、92-94頁）には406名の卒業生が掲載されている。こうした数字から校史史料には不備があるといわざるを得ない。
- 22) 前出、本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』、24-25頁。
- 23) 原康彦『文化大革命に消えた大連日語専科学校物語－40年ぶりの大連訪問記』岩成書房、2009年、109頁。
- 24) 前出、横川次郎『我走過的崎嶇小路－横川次郎回憶錄』、197頁。また詳細は、原康彦『文化大革命に消えた大連日語専科学校物語－40年ぶりの大連訪問記』（前出、37-40頁）参照。
- 25) 土井大助『末期戦中派の風来記』本の泉社、2008年、182-183頁。
- 26) 前出、本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』、22頁。